

2020年に向けた
東京文化プログラムの展開
に関する意見

浅葉 評議員

- 一つ、小さな提案ですが、「東京2020フェスティバル(仮称)」、仮称がずっと続いています。ネーミングが大切です。

- この間JAGDA(日本グラフィックデザイナー協会)の若い人2人に、「浅葉さんGRAPHIC DESIGNをひらがなで書いてください」と言われ、...たいがいは...英文かカタカナかと思っていたのですが、ひらがなで書いてみたら、清少納言や紫式部を思い出して、日本文化には重要な位置をしめるひらがなもいいなあと思いました。
- ラフ2点を送ります。

2020 と
あなごころ

あなごころ
あなごころ。

Graphic Design.

猪子 評議員

(世界的に発信できる新たな取組について)

- 日本への外国観光客は、アジアが中心で母国語は多様です。アセアンの経済成長などを考えるとより多様化していくと思われれます。
- 世界的に発信できるという視点では、言語のない、非言語なコンテンツがより世界へ届きやすいと考えられます。そして、国内での基準ではなく、世界から客観的に見て、圧倒的にすごいものが世界へと届くのだと思います。

- また、ソーシャルメディアが中心となった今、エリアの価値の重要性は下がり、圧倒的なスポットの価値へと変わって来ているのです。
- シンガポールのマリーナベイサンズのホテルの上の船のプールへ行きたい！とか、どこの国すらも知らないけどウユニ塩湖に行きたい！とか。デンマーク料理を食べたいと思ったことないけど世界一のレストランのノーマを食べにデンマークに行きたいとか。

- つまり、グローバルから見たエリアの価値とは、圧倒的なスポットがあるかどうかにかシフトしてきています。そういう意味で圧倒的なスポットを創ることが重要で、選択と集中も重要なのかもしれません。

- もしくは、世界の誰も想定していないような新たな取組がしやすいように、知的でかつ強い意志によって、寛容で自由、そして失敗に寛大な都市にする必要があるかもしれません。
- そして、大都市での新たな取組は、縦割りされた行政(省庁、都、区や警察)などに横断的に協力や許可を得ないといけません。それぞれの組織の目的も価値観も違うため往々にして難航し、心が折れてしまいます。もしくはできないものだと思い込んでしまいます。

- 都の役割は、東京を文化都市にするという強い目的で、何か新たな取組を行おうとする者への、横断的な行政への協力要請、許可の獲得、協調の強力なサポートなのかもしれません。
- その機能が強力に作用するならば、それは助成などよりもはるかに大きな効果が生まれる可能性があります。

(国内外への効果的な発信について)

- Youtube、そしてインスタグラムなどのソーシャルメディアがメディアの中心になった今、影響力のある多くの各個人が、自分が体験したものを動画や写真で発信していくことが中心となっています。
- 逆に言うと、力があるコンテンツは世界へと勝手に広まります。効果的な発信について議論するよりも、世界中から来たい、そして、体験した人々が自ら発信したい一点を創り出すことが重要かもしれません。

大野 評議員

- 1964年の東京オリンピックのレガシーとして誕生した東京都交響楽団は、現在、オリンピック・パラリンピックにふさわしい文化プログラムとして、二つのプロジェクトに着手しています。
- 一つは、世界中の才能が参加するオペラの準備を、東京文化会館と一緒に進めています。

- このオペラは、世界五大陸の音楽家やスタッフが関わりあい、国内外の劇場や実演家団体とも連携して、一つの舞台を創り上げていく壮大なものです。
- この舞台には、次代を担う子供達にも大勢参加をしてもらい、多くの人々の記憶に残り、語り継がれていく作品を創り上げていこうと考えています。
- 世界からも注目を浴び、文化プログラムにふさわしい、祝祭感にあふれたものにしていきたいと考えていますので、ご期待ください。

- もう一つは、「音楽を通してワクワク・ドキドキする体験」をコンセプトとする大規模な音楽フェスティバルを実施することを考えています。
- このフェスティバルでは、子供からお年寄り・障がい者など、誰もが楽しめる“都響ならではの”のスペシャルコンサートにする予定です。

- 会場は、池袋の東京芸術劇場を中心に検討し、56年ぶりの東京大会を機に、都響がさらなる飛躍に向けた新たな一歩を踏み出す象徴的な事業にしたいと思っています。

仲道 評議員

東京が世界へ発信する文化プログラムを考える提言書

東京だからこそできる、
ピアノを使ったクラシック音楽の祭典

- 東京が世界にその文化度をアピールするために、クラシック音楽は大切なジャンルと考えます。なぜなら、クラシック音楽は、文化的芸術的に世界共通の評価を得ているからです。
- しかしながら、すでに行われているプログラムの踏襲だけでは「東京ならではの」文化を打ち出すことができません。

- 日本は世界的な「ピアノ大国」です！
 - 4世帯に1台ピアノ＝世界一の普及率
 - ヤマハ、カワイの世界的技術
 - ピアノ人口は100万人を超える
 - 国際コンクールなど全世界での日本人の活躍
 - 教育現場への普及
 - 武満徹ら、日本人作曲家の優れた作品群

♪ ピアノを何台も何十台も集めて、プロ・アマチュアのピアニストが参加するフェスティバル

♪ 街の様々な場所で、市民や海外ゲストの飛び込み演奏、プロとの合奏など、ゲリラ的音楽イベント

- 大小、様々な規模の企画を織り交ぜることで、プロ・アマ、年齢性別を問わず広く人々を巻き込むことができます。
- こうしたイベント群により、東京の文化度の高さや広がりを世界に発信することができ、東京という都市の魅力を増すことができると考えます。

日比野 評議員

上野公園全体でのアクセシビリティ向上
によるダイバーシティ

「みんなに届ける(仮)」

- 上野公園及び敷地内にある全ての文化施設において、世界最高峰のアクセシビリティサービスを実行します。
- 美術館・博物館・音楽ホール・図書館・動物園などを訪れる障害者、高齢者、疾患患者、外国人、その他社会的マイノリティーとされる人たちに対し、それぞれの理由によって文化施設や公共空間にアクセスしにくいという障害をなくす試みに挑戦します。

- 世界最高峰のアクセシビリティとは、テクノロジーを駆使し最先端技術を用いたオブジェクト、インターフェイスだけではなく、個々の特性に寄り添う人的（ヒューマニティによる）交流支援が最も重要であると考えます。

- 目が不自由だけれども絵が見える、桜が見える、パンダが見える。耳が不自由だけれども音楽が聞こえる、鳥の鳴き声が聞こえる、誰とでも会話ができる。
- これらの機能的なアクセシビリティの重要性和同時に、誰とその感動を共有するかが文化を楽しむ上では大切なことになってきます。

- 普段は家族、施設職員、介護ヘルパーがいないと外出しにくくなかなか文化施設などには行けないけれど、上野公園なら当事者の特性を知ってくれている人たちがいて、一緒に行動してくれるので出かけやすく、楽しめる。

- 「上野に行くと障害という言葉がなくなる」そんな声が聞こえてくるような公園の実現を目指します。
- あらゆる人々が上野公園に訪れやすくなることにより、日頃上野公園に出かけている人たちもまた、多様性のある社会に必要な互いの違いを知り、互いの違いを理解し合う事が上野公園全体で体感できるようになります。

- すでに展開している「TURNプロジェクト」は、「みんなに届ける(仮)」とも連動していきます。
- 2020 年は、箱の中で何を行うかだけでなく、訪れる多種多様な人たちに対して何を行うかが大切な事であり、「違い」を魅力として捉えるアートや文化だからこそ為せる事だと思えます。
- 今の世界に日本が発信すべき意義があり、未来へのレガシーとなると考えます。